

美術の教材研究（中学校美術・小学校図画工作・幼稚園造形表現）

「教材：看板」から考える窯がなかったらと仮定した視点からの教材考察

菅 野 弘 之^{※1}

“Researching teaching materials of Art and Handicraft”

Kanno Hiroyuki

1. はじめに

長崎大学教育学部紀要において教材名「サイン・看板・表札」について実制作例を制作し掲載してきた。窯を使って焼成したものを使用しながら教材例としたものが多かった。

現在、私たち美術教育を取り巻く環境は大きく変わってきた。このような状況の中で、設備の面でも窯がなかったり、窯が使用できなかったりする教育現場がある。

そこで、昨年平成30年度『長崎大学教育学部紀要 第5集』に掲載した「教材：表札 兼原」を例に窯を使わない条件を設定し本教材を制作した場合の作品例の制作を試みることにした。焼物には焼物特有の素材の生理が存在し、その生理を基にして制作されている。学びの教材としては教科書にも用いられている。そのような状況の中、今回は陶芸を使わないことを条件にすることで（窯のない場合の教材例を提示すること）、窯のない環境の教育現場での教材例の一助とするとともに、陶芸教育の意義（大切さ）を振り返る一助としたい。

2. 制作の条件と検証について

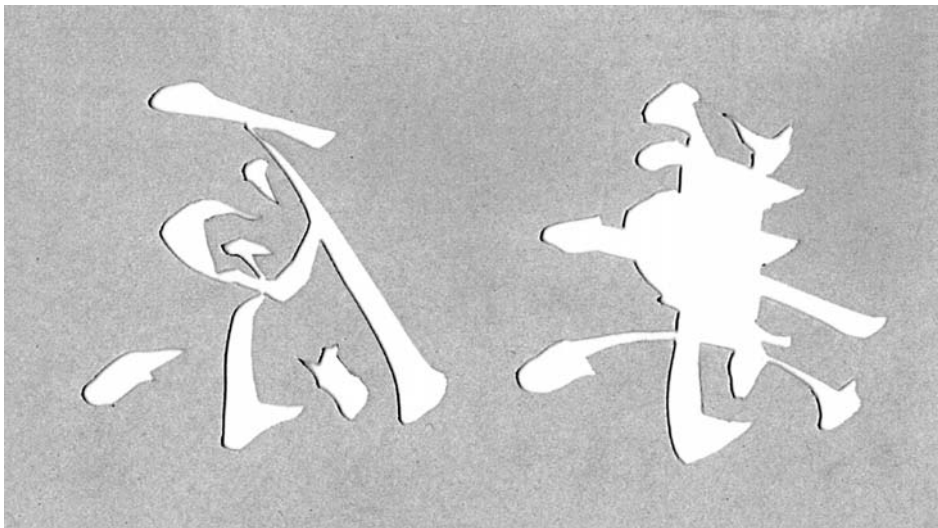
・『長崎大学教育学部紀要 第5集』に掲載した「教材研究 表札「兼原」」で使用した文字を原本として用いる。但し、その制作過程において陶芸を用いない。原本を用いて複数の教材見本を制作する。制作された教材例が、教育職員免許法施行規則第四条・第一欄 第二欄における美術免許に関する項目から美術領域における区別を試みる。その上で、所感として小学校図画工作と幼稚園の造形表現における関係性について考える。

3. 今回の制作過程



(写真1)

- ① 写真1は、『長崎大学教育学部紀要第5集』に掲載した教材研究 表札「兼原」で使
用した文字である。(紙媒体で表現したもの 今回、原本として使用)



(写真2)

- ② ①の文字を使用して型を作成する。型は反転させている状態 (写真2)
③ この型を使用して陶土以外の素材でサインを作成する。今回は紙と木で作成する。
④ 紙で作成した作品例 (写真3) 技法：切り紙 (黄緑色の部分)



（写真3）

⑤ 木で作成した作品例 「兼原」の「原」部分を彫る（写真4）（写真5）



（写真4） 彫りあげた状態



（写真5） 彫りあげた後に顔料で彩色※4

4. 技法からの分野の検証

ここでは、今回制作した作品例が教職員免許法施行規則^{※3}に定める科目区分の5領域である「絵画」・「彫刻」・「デザイン」・「工芸」・「美術史・美術理論」を基に主にどこの領域に属するかを検証していく。(※3の第二欄を考察の範囲とするため、美術科教育の領域は考察の範疇から除外する。また、今回、どこの分野に属するかの検証は、素材と技法から凡その判断を拙著がしたもので別の判断も可能であろうことを予め記す。)

3の②・④紙で制作した作品(写真3)は、紙工芸の分野にあたる。また、3の⑤木で制作した作品(写真4)は木工芸にあたる。

翻って、「3. 今回の制作過程」で示した(写真1)は、文字のデザイン分野である。

3の②で型を制作することのみを考えるとデザインと工芸両方の領域で考えることができる。(例：伊勢型紙等)

3の②を俯瞰して考えるとステンシルや孔版、トールペインティングの作品の型という考え方も可能である。デザイン分野・工芸分野・絵画分野それぞれの分野とみなすこともできる。

3の⑤ 篆刻的な要素や木彫(彫刻)の要素も含まれていることがわかる。

6. まとめ

今回の作品例から、出来上がった作品からの視点、出来上がる過程での場面的視点、過程全体を通しての視点と角度を変えて考察すると、教職員免許法施行規則^{※3}それぞれの視点での5領域中4領域である「絵画」・「彫刻」・「デザイン」・「工芸」のどこに属するか分野分けできることがわかる。

今回は教職員免許法施行規則^{※3}の5領域中の1つ「美術史・美術理論」では言及をしていないが、レタリング(文字構成)を理論的に考え文字について歴史的に考察していくことがあれば、当然視点の一つとなる。

以上のことから、美術の制作においては、各領域を跨いだり、兼ね備えたり、越境したりすることが「表現」の創造と工夫から普段行われていることがわかる。

ー所感ー

幼稚園の表現(造形)や小学校の図画工作科は、免許区分は中学校の美術科のように造形分野自体が細分化されていない。中学校美術等での各領域の教育視点を持ってそれぞれの発達段階で指導することで先を見通しながらの美術教育が可能であろうと感じた。

7. 終わりに

「表現」の創造と工夫から美術の中での各領域を跨いだり、兼ね備えたり、越境したりすることがある。「表現」された作品そのものを考える時、言葉や細分化された美術分野からの視点では、作品の全容を明らかにすることは困難を極め、限定や条件、範囲といったある種の線引が必要になることが多いように思う。だからこそ、直下に作品を観たり作ったりすること、そして、合目的なものならば合目的なものとして扱うことを心掛けたいと感じた。また、今回触れていない美術教育で造形感覚を涵養することを目的の一つとして持っているならば、小林秀雄の言^{※5}を待つまでもなく、－美しい「花」がある－ことを

最初に受け止めることが美術教育の教科としての特色であり重要な芸術としての個性であろうと思った。

註

- ※1 長崎大学人文社会科学域（教育系）教授 工芸担当
- ※2 写真1・2・3・4・5は拙著による制作・撮影
- ※3 昭和二十九年文部省令第二十六号 教育職員免許法施行規則第四条・第一欄 第二欄における美術免許に関する項目
- ※4 長崎大学 人文社会科学科学領域（教育係）准教授 牧野一穂氏から木を下地にした日本画顔料の使用法について助言をもらう。
- ※5 『小林秀雄全作品』、新潮社、P137、L7 引用
原書は昭和17年『文学界』に発表された

